

冷戦期の中国対欧州外交:「ドイツ問題¹」への関与の確立と 対東ドイツ支援を中心に 1949-1955

SHAO TIANZE (京都大学)

1. 研究の目的・背景

はじめに: 本日、日韓次世代学術フォーラムという場で発表させて頂く機会を得られて誠に有難うございます。私は冷戦期における中国対欧州外交と対東西ドイツ政策というテーマの研究に従事しております。2017年にこのフォーラムを通じて韓国人の研究者らとの交流から、中国と分断国家の関係性という視点から朝鮮半島とドイツの類似性に気付きました。詳しいお話を割愛させていただきますが、現時点で私が見た史資料で受けた印象と言いますと、中国は 92 年に韓国との国交正常化という従来の対朝鮮半島政策の転換点に臨んだ際、72 年の「ドイツ経験」が実に大きく貢献したのではないかと考えます。従いまして、本日の報告は単なる中国・東ドイツ関係の話だけではなく、聞き手の皆様にとって、中国と東ドイツの関係から当時の中国外交の特徴と行動様式に対する知見を深められる機会になれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

研究の目的: まず、現在発表者の研究は、冷戦期の中国が「向ソ一辺倒」を国是とする 50 年代初期から、中ソ対立が激化した対外戦略を修正した 60 年代前半を対象に、欧州地域に向ける中国の外交戦略とその対東西ドイツ政策をを外交史的アプローチによって明らかにすることを目的としています。そして、今回の研究報告の内容は、上記研究題目の重要な一環として中国と東ドイツが建国した 1949 年初期から西ドイツがパリ協定により主権の回復が果たされる 1955 年までの間に、中国が主に貿易協定を通じてドイツ問題への関与を確立し対東ドイツ支援の過程を主に両国の一次史料に基づいて検証し、その特徴について論ずることです。

研究の背景: 研究の全体の背景について説明します。国共内戦を勝ち抜いた中共は 1949 年に中華人民共和国を樹立し、国際社会における新中国の承認と自国の安全保障を最重要課題としました。しかし、朝鮮戦争によって米中両国が完全に敵対関係となり、台湾統一は不可能になったばかりか、対米関係を通じて中国の存在を国際社会に承認させることも極めて困難になりました。また「向ソ一辺倒」を外交方針とした中国は、社会主義陣営に加わり、その盟主であるソ連からの援助を受け入れ軍事同盟を結び、新生中国の生存をソ連に賭けました。このように、建国直後の中国にとって、米ソが巨大な影響力を保持しました。これまでの研究²は、中国外交における対米ないし対ソ政策の分析に当てられてきました。しかし、本研究は敢えて中国の欧州外交と対東西ドイツ政策という別の観点から中国外交を論じます。その理由は、第一に、中国外交部の档案資料(公文書)は 2004 年から 2008 年にかけて、新規公開によって、中国の対外政策全般において、対米・対ソ政策以外の研究領域にも踏みこむ条件が格段に整いました。無論、対米・対ソ政策研究の重要性が失われたわけではありません。むしろ、新たな一次史料の利用によって、中国の対外政策をより多面的、また新しい角度から書き出すチャンスを得ることになりました。第二に、中国が建国した年は進展中の東西冷戦という国際的文脈に組み込まれました。同じ時期にドイツが分断され、東西それぞれの陣営に属し、欧州冷戦の最前線で

¹ 第二次世界大戦後のドイツの東西分裂と再統一に関する諸問題をいう。詳しくは The Cold War, the German Question, and the First Major Upheaval behind the Iron Curtain (Budapest: Central European University Press, 2001), pp. 71-73

² 楊奎松編『冷戦時代中国の対外関係』(北京、北京大学出版社 2006 年); Chen Jian, Mao's China and the Cold War, The University of North Carolina, 2001.; Lorenz M. Lüthi, The Sino-Soviet Split-Cold War in the Communist World, Princeton University Press, 2008. など。

対峙しました。中国からみれば、社会主義陣営同士の東ドイツ、そして西側陣営に属しながらも貿易上魅力的な工業大国・西ドイツ、この二つのドイツに対する外交政策は常にイデオロギーとプラグマティズムの狭間に苦心しました。従来の研究が主張したイデオロギーの観点とは異なり、本研究はプラグマティックな側面から考察することが重要だと考えます。第三に、米中対立が依然として激化している現在、中国・EU関係ないし中独関係の歴史と現状が非常に注目されています。中独両方向からバランスのとれた実証的研究はまだ限られており、本研究はその間隙を埋め、中国・EU 関係や中独関係の歴史と現状に対する知見を生み出し、社会的要請に応えます。さらに、中国外交に立脚した本研究は中国の対外戦略の事例研究にも貢献できます。

2. 中国・東ドイツ関係の樹立と展開、特徴とその問題点

中国・東ドイツ関係の樹立と展開：1949年10月1日、中華人民共和国は建国し、わずか一週間後の10月7日に、ドイツ民主共和国も建国しました。米ソが対立しはじめた戦後の頃は、この二つの新生国家はともに社会主義陣営に入り、国際社会やグローバル冷戦の一員にもなりました。1949年10月27日に中国と東ドイツの間で正式に外交関係が樹立されてから、1955年12月25日に中独友好協力条約が締結されるまで、この期間は基本的に中国と東ドイツの関係発展における第1段階と見なすことができます。この時期、中独関係は基本的に相互の接触と理解の初期段階にあり、両国とも新体制が発足したばかりで、まだお互いをよく知らない状態でした。しかし、両国ともマルクス・レーニン主義思想の政党が統治していたため、両党・両国は当然、「兄弟政党」「兄弟の国」とみなしていました。東ドイツと中国の友好関係が確立した当初は、東ドイツがより積極的に中国に助けを求めました。逆に中国は東ドイツの要求を支持し、受け入れようとした。

特徴とその問題点：この両国の融和ムードは、1951年の中国と東ドイツの貿易協定交渉の際、西ドイツの国民に対する東ドイツの統一戦線戦略を支援するために、中国は東ドイツが中国と西ドイツとの貿易を単独で「仲介」することに原則的に合意し、両国が巨額の対外貿易損失を被る結果となりました。また、1953年の「東ベルリン暴動事件」後、ドイツ政府は自国の食糧逼迫の問題を解決するため、中国に1953年の補足貿易協定の締結を要請し、中国は国内事情が好ましくないにもかかわらず、5300万ルーブル相当の農産物および副産物を東ドイツに供給しました。1955年に東ドイツとソビエト連邦との間の関係条約が調印された後、東ドイツは自国の主権をさらに外交的に認めるために、中国に中独友好協力条約の締結を求め、中国は同年末にこれを迅速に承諾し、中国と東ドイツの関係は新しい段階に入りました。

これらの重要な出来事の背後で、決定的な役割を果たしたのは、東ドイツのドイツ問題に対する立場の変化でした。しかし、東ドイツのドイツ問題に対する立場は、実は、ソ連のドイツ政策の変化と歩調を合わせて変化していったのです。この時期の中国と東ドイツとの関係において、ソ連の対ドイツ政策が構造的な背景を形成し、重要な役割を果たしたことは言うまでもありません。一方では、ソ連のドイツ政策が直接的に東ドイツの外交方針を決定し、他方では、その外交戦略が中国の対外戦略に影響を与え、この時期、中ソは互いに調和していました。

ドイツ再統一に向けた具体的な取り組みから、ドイツ統一社会党(SED)が東ドイツに社会主義社会を建設するという決断、スターリンの死後、ソ連の新指導部が対独政策を変更しようとしたが、「東ベルリン暴動事件」で中断し、社会統一党の体制を守ることに固執する決意がされ、そしてソ連が最後に「二つのドイツ」を認めたことに至るまで、東ドイツは、国際社会からの外交的承認を求めるようになりました。こうしたドイツ問題に関する政策の変化は、東ドイツと中国との間の多くの些細な問題に影響を及ぼし、1950年代初頭の東ドイツと中国との間の対外貿易における経済的損失、1953年の中国による東ドイツへの農業援助、1955年の中独友好協力条約締結などは、直接的または間接的に東ドイツへの支援を増強しました。中国は最初から東ドイツの支

持者でした。この支援は、中国が「社会主義家族の一員」であるというアイデンティティによって可能になったことは間違いありません。中国と東ドイツは、国際政治の舞台で初めて出会ったばかりで、互いに見知らぬ者同士であったが、マルクス・レーニン主義の思想に基づいて、互いに兄弟としての関係構築しました。しかし、そのために、具体的な問題に直面する際の矛盾や相違が保留されました。

3. 中国の対東ドイツ支援の実態とその結果(概観)

3.1 1951 年度の中独貿易協定:「政治が経済を左右する」

1950 年の貿易協定交渉の際、東ドイツは未だ中国にとって事実上全く未知の国でした。中国側は、東ドイツの生産・供給能力、組織能力、ソ連支配下の工場と東ドイツの関係、東ドイツと西ドイツの政治・経済関係、交渉に対する東ドイツの狙いと要求について、適切な理解が足りませんでした。しかし同時に、中国は東ドイツを社会主義陣営の兄弟の国として意識的にとらえ、政治的目標を達成するためなら経済的利益を犠牲にしても資本主義世界に対して対抗すべきだというイデオロギーで結ばれていました。中国と東ドイツの関係において、「政治が経済を左右する」という現象が繰り返されることになります。貿易協定の結果として、東ドイツは西側の禁輸や納期の見積もりが甘かったなどの理由から、貿易協定を予定通りに履行せずに中国側に多大な損害を被らせました。

3.2 1953 年「東ベルリン暴動」と中国の対東ドイツ援助:さらなる支援の受給と負債の増加

1953 年の「東ベルリン暴動事件」後、ドイツ政府は自国の食糧逼迫の問題を解決するため、中国に 1953 年の補足貿易協定の締結を要請し、中国は国内事情が好ましくないにもかかわらず、5300 万ルーブル相当の農産物および副農産物を東ドイツに供給しました。元々 1951 年の貿易協定が不調で、中国側に 4.2 億ルーブルの輸出負債を負っており、その後の両国の貿易に大きく影響しました。しかし、「東ベルリン暴動事件」により、窮地に追い込まれた東ドイツへの支援のために、中国は新たに補足貿易協定を用意しました。これにより、中国に対する東ドイツの貿易負債がさらに膨らみました。政治的にも、東ドイツは中国から多大な応援を受ける結果となりました。

3.3 1955 年中独友好協力条約:新しい次元とアジア諸国との関係発展の拠点としての中国

1955 年 12 月 25 日、東独首相のグローテヴォールと周恩来首相が中独友好協力条約に調印したことは、両国関係の新しい次元に邁進したことを示すものでした。東ドイツにとって、中国と何らかの同盟関係を結ぶことの意義は、単に両国の関係を強化することだけではありませんでした。さらに重要なことは、アジアの大国としての中国の影響力が、第三世界における東ドイツの影響力を増進するということでした。東ドイツにとって、北京はアジア諸国の代表と接触するのに最適な場所です。その後、たしかにアジア諸国との関係構築のために中国から支援を受けることが多くありました。

4. 今後の課題

1955 年以降、パリ条約により占領国から主権を取り戻した西ドイツが登場します。「ドイツ問題」をめぐる東西ドイツの駆け引きが熾烈に展開し、さらに中国の対東西ドイツ政策も形成しつつあります。中国側の史料公開の遅れもあり、従来の研究はでは中国の東西ドイツ政策がどのタイミングで変容したのか、また何をきっかけ

に変化したのが十分に明らかにされていませんでした。本報告で明らかにしたように、中国の外交文書を軸にした分析を通じて、50年代半ばに中国・東独貿易の不調から、中国が工業生産上の需要の面から西独の重要性を見出し、従来の対東西ドイツ貿易のバランスを再考したことがわかりました。しかし、具体的な中・西独貿易の実情に関しては、報告者が収集した中国の外交文書だけでは不十分です。そのため、現地研究者の教示により申請者が注目しているのは、党中央からの指示や報告に関する地方档案馆です。これまでに報告者は単独で北京、上海、天津の文書館を訪れた。50年代初頭にいち早く西独と貿易を展開した国営第一自動車の企業文書館（於長春市）と吉林省文書館を訪れたものの、警戒されて門前払いされた。今後は、これまでに収集した史資料の整理・分析に努めつつ、すでに信頼と協力関係を築くことのできた現地の研究者の協力のもと、中国各地にある地方档案馆を再調査します。また、地方図書館、外事弁公室や宣伝部などの関係機関の内部刊行物を現地の法律法令に遵守した上で収集します。今後は再調査の結果に加え、これまでに収集できたドイツや米国側などの一次史料に照らし合わせ、双方向的に史実と統計データを検証し中国の対東西ドイツ外交の展開と変容の過程を丹念に追っていきたいと考えます。

参考文献(一部のみ)

中国語文献：

[德]迪特·海茵茨希：《中苏走向同盟的艰难历程》(张文武等译)，北京：新华出版社2001年版/薛衡天：《中苏关系史(1945—1949)》，成都：四川人民出版社2003年版/ 沈志华、李丹慧：《战后中苏关系若干问题研究——来自中俄双方的档案文献》，北京：人民出版社2006年版/ 杨奎松：《毛泽东与莫斯科的恩恩怨怨》，南昌：江西人民出版社2006年版/ 沈志华：《毛泽东、斯大林与朝鲜战争》，广州：广东人民出版社2007年版/ 沈志华：《无奈的选择：冷战与中苏同盟的命运(1945—1959)》，北京：社会科学文献出版社2013年版/ 吴景平：《从胶澳被占到科尔访华——中德关系(1861—1992)》，福州：福建人民出版社1993年版/潘琪昌主编：《百年中德关系》，北京：世界知识出版社2006年版；裴坚章主编：《中华人民共和国外交史》第1卷，北京：世界知识出版社1994年版/ 王泰平主编：《中华人民共和国外交史》第2卷，北京：世界知识出版社1998年版/王泰平主编：《中华人民共和国外交史》第3卷，北京：世界知识出版社1999年版。

欧文献：

Odd Arne Westad, ed., *Brothers in Arms: The Rise and Fall of the Sino-Soviet Alliance 1945-1963* (Washington, D.C. and Stanford: Woodrow Wilson Center Press with Stanford University Press, 1998) / Lorenz Lüthi, *The Sino-Soviet Split: Cold War in the Communist World* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2008) / Sergey Radchenko, *Two Suns in the Heavens: the Sino-Soviet Struggle for Supremacy, 1962-1967* (Washington, D.C. and Stanford: Woodrow Wilson Center Press with Stanford University Press, 2009) / Joachim Krüger, "Die Volksrepublik China in der Aussenpolitischen Strategie der DDR (1949-1989)," in Kuo Heng-yü und Mechthild Leutner, hrsg., *Deutschland und China/ Beiträge des Zweiten Internationalen Symposiums zur Geschichte der Deutsch-Chinesischen Beziehungen Berlin 1991* (München: Minerva Publikation, 1994), S. 43-58; "Zu Gast in Peking. Die DDR und die VR China in den 80er Jahren," *WeltTrends: Zeitschrift für internationale Politik und vergleichende Studien*, Nr. 2, 1994, S. 133-144/ "Das letzte Jahrzehnt der Beziehungen der DDR zur Volksrepublik China," in Mechthild Leutner, hrsg., *Politik, Wirtschaft, Kultur: Studien zu den deutsch-chinesischen Beziehungen* (Münster: Lit Verlag, 1996), S. 63-76/ "Das China-Bild in der DDR der 50er Jahre," *Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung*, Band 25, 2001, S. 258-273/ "Das erste Jahrzehnt der Beziehung," "Die parteiinternen China-Informationen der SED-Führung 1969-1988," in Joachim Krüger, hrsg., *Beiträge zur Geschichte der Beziehungen der DDR und der VR China/ Erinnerungen und Untersuchungen* (Münster: Lit Verlag, 2002), S. 65-111/163-171/ Claudie Gardet, *Les relations de la République de Chine et de la République Démocratique Allemande (1949-1989)* (Bern: Peter Haupt, 2000).